夢のネックレス

七転八起

春日信彦

負け犬

８月に入ると３５度以上の猛暑が続き、全国では、６０００人以上の人が熱中症で倒れ、病院に搬入された。例年の夏休みであれば、子供たちは、公園で遊んだり屋外プールで泳いだりしていたが、猛暑の今夏ばかりは、外出が危険な状況にあった。能天気でやんちゃなスパイダーでさえ、あまりの暑さに家から出ようとしなかった。亜紀は、冷房の効いた部屋でゲームをするより、公園で友達と一緒に遊びたかったが、心配性のアンナに外出を禁止されていた。

８月８日（月）“笑いの日”、亜紀が窓際でピースと戯れていると、３６度の猛暑の中、頭のてっぺんに穴が開いた麦わら帽子をかぶり真っ黒に日焼けしたヒフミンが、植木の外から右手を大きく振って「オ～～イ」と挨拶した。友達と遊びたかった亜紀は、ベランダに飛び出し両手でピースを持ち上げ、ヒフミンを誘うようにピースをブラブラと左右に振った。びっくりして目を丸くしたピースは、「オモチャじゃないのよ」と叫んだが、亜紀の耳には届いていなかった。

ピースを見せられたヒフミンは、結婚したいほど好きなピースを今すぐ抱きしめたくて、ジャンプしながら両手を振り、玄関に向かって駆け足で突進していった。玄関のドアをドバッと勢いよく開くと、「コンチワ～」と大声を張り上げ、靴を脱ぎ散らかし、リビングに駆けて行った。キッチンで昼食の準備をしていたアンナは、突然現れたヒフミンにワオ～～と悲鳴を上げた。

びっくり仰天したアンナに向かって「お邪魔しま～す」と言うや否やリビング東側にある階段をドタドタドタと２階へ駆け上がって行った。「アキチャ～～ン」と大声が廊下に響き渡ると亜紀に抱っこされているピースをめがけて部屋に飛び込んだ。「ヒフミン、落ち着きなよ。ピースは逃げやしないから」ムカついた亜紀は、ガサツなヒフミンの傍若無人をたしなめた。

「ピース、会いたかった～」ヒフミンは、亜紀に抱っこされたピースをグイッと奪い取り、ピースのホッペにチュ～とキスをした。汗びっしょりのランニングシャツで抱きしめられたピースは、その汗臭さに鼻がもぎれそうで、ニャ～～、ニャ～～と悲鳴を上げて顔を激しく左右に振った。ピースは、猫好きのヒフミンが嫌いではなかったが、手加減を知らないかわいがり方に苦痛を感じていた。

あきれ返った亜紀は、脚の短い小さなピンクの丸椅子に腰かけ、ヒフミンを睨み付けた。
「ちょっと、いつものことだけど、もう少し、静かにできないの。女子って、ガサツなのは、嫌いなのよ。聞いてるの？」ピースに心を奪われているヒフミンの耳は、耳栓をしているようなものだった。両腕でしっかり抱きしめられたピースは、息苦しくなり逃げ出したかったが、身動きできないほどに抱きしめられ、抱っこの拷問にじっと耐えていた。

亜紀は、大声を張り上げた。「ヒフミン、ピースが嫌がってるじゃない。もっとやさしく、ダッコしてあげてよ」ついにピースも我慢が出来ず、独りよがりのヒフミンの左ほほにバシッと猫パンチを食らわせた。猫パンチを食らったヒフミンは、びっくりしてとっさに両腕を開いてしまった。突然落とされたピースであったが、忍者のごとく身をひるがえしフワッと着陸すると、捕まっては一大事と逃げるように部屋からピョンピョンと跳び出ていった。

ガサツでバカなヒフミンと亜紀は心で笑って声をかけた。「死ぬほど猫が好きなのは、分かるんだけど、かわいがるのにも、手加減ってものがあるんじゃない。もっと、優しくかわいがってよ。ピースは、嫌がってるのよ。こんなことしてたら、ヒフミンの顔を見たとたん、逃げ出すようになるかもよ」ピースに逃げられがっかりした子ブタのヒフミンは、脚の短いホワイトの丸椅子にドスンと腰を落とした。

ちょっとでも暇な時間がれば将棋を指す将棋バカのヒフミンが、このくそ暑い日の午前中から外で遊ぶなんて、もしかしたら、地震の前兆じゃないかと思った。いつもならば、亜紀の部屋に入ってくるなり、書棚の一番下に置いてある将棋盤と駒を持ち出してきて、亜紀の前にポンと置くのだったが、今日は、将棋を指す雰囲気がまったく見られなかった。いつもと違うヒフミンのことが気にかかり、ぼんやりと窓の外を眺めるヒフミンに声をかけた。「将棋する？」

ヒフミンは、依然としてぼんやりと青空に浮かぶ綿菓子のような白い雲を見つめ、返事をしなかった。亜紀は、ますます心配になった。もしかして、家族に大変な何かがあったのではないかと思った。顔色を覗き見てもう一度声をかけた。「ヒフミン、将棋する？」今初めて声をかけられたかのようにハッとして、振り向くと返事した。「あ、将棋、もうやんない。将棋、やめたんだ」三度の飯より大好きな将棋をやめたと聞こえた亜紀は、自分の耳を疑った。

「え～～、マジ、やめたの？どうして？どこか具合でも悪いの？」ヒフミンは、しばらく黙っていたが、唇を真一文字にすると自分の思いを告白する決意をした。「いや、病気じゃない。自分で決めたんだ。もう、一生、将棋の駒は握らない。小学校を卒業したら、軍事工場で働くんだ。もう決めたんだ」亜紀は、信じられない返事に何と言って答えていいか戸惑ってしまった。一呼吸おいて、聞き間違いでないかと確認した。「マジなの？小学校を卒業したら、働くって？」

ヒフミンは、大きくうなずいた。「マジだとも。お姉ちゃんは、来年の春、中学校を卒業したら、軍事工場で働くんだ。僕は、小学校を卒業したら、軍事工場内にある全寮制の中学校に通いながら、お姉ちゃんと一緒に働くんだ。中学生でも、働けば、給料がもらえるんだ。そうすれば、お母ちゃんとおじいちゃんに薬を買ってあげられる。ガンバル」ヒフミンは、すでに決めた気持ちを淡々と打ち明けた。

亜紀にとっては、子供が家族のために働くということがまったくピンと来なかった。親が子供を育てるということは当たり前で、学校で勉強して、好き勝手に遊べるのが子供の普通の生活だと思い込んでいた。「あ、そう、将棋って、将棋盤と駒があれば、いつでもできるじゃない。働きながらでも、将棋、指せばいいじゃない。やめることはないと思うんだけど」

将棋は、働きながらでも、手軽に遊べるゲームと思っている亜紀は、将棋をやめる理由が今一つ理解できなかった。ヒフミンの得意な将棋の話で暗い空気をはねのけようと思ったが、ますます、ヒフミンの顔がしかめっ面になった。ヒフミンは、ガクンと首を折ると、ぼそりとつぶやいた。「もう決めたことなんだ。将棋は指さない。頭から将棋を消し去りたいんだ」亜紀には、ヒフミンにとっての将棋というものが今一つピンと来なかった。

「将棋って、気軽にやれるゲームの一つじゃない。ヒフミンは、将棋が得意なんだし、友達と楽しく、気軽にやればいいと思うんだけど。そう、中学生になったら、寮生活するんでしょ。きっと、友達作りに役立つと思うよ。小学生チャンピョンの腕前を自慢すればいいじゃない。やめなくてもいいと思うんだけど」ヒフミンは、うなだれてじっと聞いていた。今の気持ちを誰もわかってくれないと思ったが、亜紀にだけはほんの少しでも分かってほしくなった。

顔を持ち上げたヒフミンは、亜紀の顔をちょっと覗き見て窓から見える手の届かない青空を見つめつぶやいた。「亜紀ちゃんの言う通りだよ。将棋って、ちょっとした遊びだよな。でも、駒を動かし始めれば、もう、後戻りはできない。自分が勝か、相手が勝か、白黒がつくまで戦わなくちゃいけない。まったく、残酷なゲームだ。そんなゲームに夢中になるなんて、ほんと、バカだ。だから、奨励会は受験しない。闘う前から負け犬さ。でも、それでいいんだ。僕の人生なんだから」

亜紀は、小学生チャンピョンのヒフミンが、奨励会を受験しないなんて、信じられなかった。試験に不合格だった時のことを恐れて受験しないのかとも思えたが、ガサツで気の強いヒフミンのことを思うと、それとは違う誰にも言えないような家庭の事情があるように思えた。「事情は分からないけど、受験しなよ。まだ４年生じゃない、今年がダメでも、来年受験すればいいじゃない。ヒフミンは、小学生チャンピョンなんだから、きっと合格するよ」

ヒフミンは、ゆっくり顔を左右に振り、しばらく寂しそうな表情で窓の外をぼんやり眺めていたが、か細い声で話を続けた。「いや、気持ちの問題さ。僕は、一生受験するつもりはない。プロになる夢も捨てた。将棋人生は、もう終わりだ。自分で決めたことだし。後悔はしていない。これでいいんだ」言い終えたヒフミンは、ガクンと首を折った。とっさに亜紀が声をかけようとしたとき、目頭からポトッと涙が落ちた。それを見て、一瞬言葉に詰まった。

じっと耳を傾けていた亜紀だったが、ヒフミンの絶望はどこから来るのだろうかと不思議でならなかった。まだ４年生だし、受験のチャンスは、まだまだある。いったい全体、“もう、来年はない、もう、終わりだ”って、まったく言っている意味が分からなかった。ニコッと笑顔を作った亜紀は、ヒフミンを励まそうと明るい声でハッパをかけた。「ヒフミン、どうしてあきらめるの？どうして受験しないの？ヒフミンは、小学生チャンピョンよ。将棋の天才じゃない。きっと、合格すると思う。将棋バカの意地を見せなよ」

ちょっとムカついたヒフミンは、きりっと目を吊り上げた。亜紀は、何もわかってないくせに、言いたいことを言いやがって、と心で叫んだ。所詮、金持ちには貧乏人の気持なんかわからない、としみじみ思った。「そうさ、ただの将棋バカだ。だから、将棋なんかやめる。これ以上、バカになったら、どうしようもないから。小学校を卒業したら、軍事工場でがむしゃらに働き、将来、立派な工場長になって見せる。これが、僕の夢さ」ヒフミンは、強がりの嘘を並べ立てた。

祖父に３歳から毎日指導を受け、４年生で小学生チャンピョンにまでなったヒフミンには、奨励会試験に合格するだけの実力が、十分にあった。でも、もし、受験して合格したなら、入院するお金もなくて、家で寝込んでいる母親を困らせることになるのではないかとヒフミンはひそかに思った。でも、もしかしたら、母親は、受験を勧めてくれるかもしれないと心の底ではほんの少し甘い期待をしていた。

ついに決意を固めたヒフミンは、母親の気持ちを確かめようと７月末の奨励会受験申込締切り間近になった時、病床に臥せている母親の枕元でつぶやいた。「お母ちゃん、奨励会受験するの、やめた」その言葉を聞いた時、母親はほんの少し目を開いてがっかりした顔を見せたが、即座に、鋭い眼差しでヒフミンを見つめると「自分の好きなように、おやり」とバシッと返事した。そして、静かに目を閉じた。

母親の瞼の裏には、一心不乱に盤上の駒を見つめる少女の後ろ姿が浮かび上がった。母親も中学生までプロ棋士を目指して必死に頑張っていた。しかし、能力の限界を感じ、プロへの道をあきらめた。だが、あの時、あきらめるべきではなかった、と今でも後悔していた。だから、ヒフミンだけには、そんな思いはさせたくないと陰ながら応援してきた。もし、元気であれば、“甘ったれた根性を叩きなおしてやる”と真剣勝負の対局をしたい思いでいっぱいだった。でも、腎臓病で苦しむ母親には、もはや起き上がる力も残っていなかった。

じっと涙をこらえた母親は、ヒフミンをお守りくださいと神に祈ると、力尽きたように一瞬、ほっとした表情を見せた。その表情を見たとき、母親の本心を見抜けないヒフミンは、クルッと母親に背を向け、“あれでよかったんだ、後悔はしていない”、と涙をこらえて心でつぶやいた。部屋に戻ったヒフミンは、母親から譲り受けた大切な将棋盤と駒を部屋の中央に置くと正座して一礼した。

「お母ちゃん、おじいちゃん、お姉ちゃん、ごめんなさい」とつぶやき、将棋盤と駒を燃えないゴミ専用の黄色い袋に押し込み、ガムテープでぐるぐる巻きにしてしっかりと包み込んだ。「今まで、ありがとう」と黄色い袋に包まれた将棋盤と駒に声をかけ、もう一度、深々と一礼した。神様にお供えするように両手でそっと黄色い袋を持ち上げたヒフミンは、勝手口から裏庭に回り込んだ。

裏庭に用意していた小さなシャベルを手にすると深さ５０センチほどの穴を掘った。ひんやりとした穴の底をしばらく見つめ、「さようなら」と黄色い袋に声をかけるとそっと穴の底に置いた。そして、また、穴の底でこれから眠り続ける黄色い袋をしばらく見続けた。意を決しシャベルを手にしたヒフミンは、ザクッと土をすくい、少しずつ黄色い袋の上に土を流し込んでいった。完全に埋め尽くすと右足で何度もドシドシと踏み固めた。その埋められた穴の上に両足で直立したヒフミンは、両手を合わせ、奇跡を神に祈った。

南の島のおじいちゃん

亜紀は、この夏休みにぜひとも、南の島に住んでいるおじいちゃんに会いたかった。亜紀は、一度も会ったことがなく、電話で話したこともなかった。時々やってくる執事の優しいおじさんにおじいちゃんのことを尋ねてみたが、白髪のイケメンで世界一の金持ちだということぐらいしか話してくれなかった。そんなおじいちゃんのことを時々想像したが、身体はやせ細って、顔はしわくちゃなおじいちゃんの姿しか頭に浮かばなかった。

夏休みが終わらないうちにどうにかして会いたいと思った亜紀は、さやかがやってくる８月１１日、“山の日”の夕食のときアンナとさやかにお願いすることにした。さやかの身体検査は一通り終了していたが、５月初旬に極秘で急きょ入院した会長の看護のため帰宅することができなくなっていた。今夜は、最近なんとなく元気のない亜紀を喜ばすために家族全員でバーベキューをしようと特別に許可を得て帰宅したのだった。午後６時にバーベキューの準備が整い、テラスの前の庭に、アンナ、さやか、亜紀、拓実、ピース、スパイダー、たちは集まった。

アンナは、みんなに声をかけた。「焼けてきたわよ、さあ、食べましょう」アンナは、拓実のために肉を小さく切って口に入れてあげた。亜紀は、よだれを垂らしお座りしているスパイダーの取り皿にお肉を一切れ置き、お肉を食べないピースには、キャットフードをお皿に注いだ。アンナは、腰に手を当て、胸を張って大声を張り上げた。「今日のお肉は、バリ高級佐賀牛よ。お腹が爆発するぐらい食べていいわよ」

亜紀は、ワオ～～と歓喜の声をあげ、尋ねた。「マジ、どこで買ったの？」アンナは、即座に答えた。「前原のフードウェイ。ここのは、はずれがないわね」ペロリとたいらげたスパイダーは、前足でステップを踏んで亜紀におねだりをしていた。「ママ、スパイダーに、もっとあげてもいい？」アンナは、スパイダーのための肉も用意していた。「スパイダーには、これ。まったく、底なしにガッツクンだから」アンナは、スパイダー用の牛肉が盛られたお皿を亜紀に手渡した。

亜紀は、アンナの顔色を窺っていた。お肉を食べて機嫌がよくなった頃合いを見て、おじいちゃんの話を切り出すことにした。「ママ、夏休み、どこか、旅行に行きたいな～、できれば南の島」アンナは、拓実が生まれてから旅行に行く気分になれなかった。さやかが一緒であれば、考えなくもなかったが、まだ、さやかは旅行に行ける様子ではなかった。「そうね～、拓実がもう少し大きくなったら、さやかも一緒にハワイにでも行こうかしら、ネ～さやか？」

さやかは、桂会長の入院さえなければ、この夏にでも行けるのにと思ったが、会長の入院については話すわけにはいかなかった。「旅行でしょ、そういえば、このところ行ってないな～。来年は、拓実ちゃんも３歳になることだし、来年の夏は、ハワイに行くとしようか」来年と聞いた亜紀は、がっかりした。どうしても、この夏におじいちゃんに会いたかった。「来年じゃダメ、この夏に行きたい。おじいちゃんがいる南の島に行きたい。いいでしょ、ママ。お願い」おじいちゃんと聞いたアンナは、目を丸くしてさやかを見つめた。

さやかもおじいちゃんと聞いて、どぎまぎしてしまった。と言うのは、今年の８月１５日、終戦記念日で７７歳になる桂会長は、今年の５月初旬から前立腺癌で志摩総合病院に入院していたからだ。このことは、極秘事項でアンナにも知らせることができなかった。たとえ急死しても、即座には報道されないことになっていた。さやかは、なんと言って亜紀の気持ちを変えさせようかと思ったが、それかといって、会長がいつまで生きながらえるか心配されていた。

この機会を逃したために会長に会えなくなれば、さやかの罪のようにも思えた。会長の入院をアンナに知らせ、二人に面会させるべきだとは思えたが、本当のことが言えない今、亜紀に何と言って話をごまかそうかと頭をひねった。「おじいちゃんね、世捨て人というか、ちょっと変人なのよ。孤独が好きみたいで誰とも会わない人なのよ。とにかく、お姉ちゃんに任せて。会えるように、掛け合ってみるから。亜紀ちゃん、いい」

亜紀の胸は、会いたい気持ちで、はちきれそうだった。一目でいいから、この夏に会いたかった。「どうしても会いたい。さやかお姉ちゃん、必ずよ。この夏に、必ずよ」さやかは、掛け合うと言ってみたもののドクターから承諾を得る自信はまったくなかった。会長の病状の事実は、肉親にだけは知らせてもいいのではないかと思ったさやかは、早速明日にでも、面会のことをドクターに電話で聞いてみることにした。

亜紀の横で話を聞いていたピースもおじいちゃんに会いたいと思った。「亜紀ちゃん、ピースも会いたいな～。南の島に、一緒に連れて行ってよ」ピースを抱きかかえるとピースを見つめうなずき、さやかに追い打ちをかけた。「会えるかどうか、いつわかるの？明日？明後日？」亜紀は、いてもたってもいられなくなった。スパイダーも話に割り込んできた。「ボクも、一緒に行きたい。留守番はイヤだ」亜紀は、是が非でも会う決意をした。「もし、ダメって言われたら、亜紀が直談判する。もう、会うって、決めたんだから」

話を聞いていたアンナは、とんでもないことになってしまったと慌てふためいた。できることなら、一生、あの老人には会いたくなかった。本当の父親かどうかわからない老人を亜紀のおじいちゃんと言って会せることは、罪になるような気持ちになった。それかといって、今ここで、おじいちゃんに会いたいという亜紀の気持ちをぶち壊したくなかった。アンナは、さやかの困惑した顔を見て戸惑ったが、すべてをさやかの判断に任せることにした。

「亜紀、さやかを困らせちゃダメ。さやかに任せなさい。待てば海路の日よりあり、っていうでしょ」アンナは、最近憶えた格言を言ってみた。亜紀は、このような気の利いた格言を口にしたアンナに一本取られてしまった。肩を落とした亜紀は、しぶしぶうなずき、返事した。「はい、さやかお姉ちゃん、よろしくお願いします」さやかは、亜紀の素直な態度にほっとしたが、会長の容体を思い浮かべたとき、不吉な予感が心をよぎった。

翌朝、電話でドクターに面会の件を相談したところ、アンナが望むなら面会は可能とのことだった。会長も死ぬ前にもう一度アンナに会いたい、とつぶやいたと言うことだった。早速、昼食後、アンナに会長の入院と病状について話すことにした。昼食後、リビングにアンナを呼ぶと怪訝な顔をしてさやかの前に腰かけた。「改まって、何よ。あ、おじいちゃんの件でしょ。無理しなくていいのよ。あんなわがまま、ほっとけばいいのよ」

さやかは、大きく深呼吸して穏やかに話し始めた。「まあ、おじいちゃん、じゃない、桂会長のことなんだけど。ちょっと、深刻なことになっているの」アンナは、深刻と聞いて身を乗り出した。「深刻って？」さやかは、少し躊躇したが、思い切って話し始めた。「このことは極秘事項よ。アンナだけには、話してもいいとドクターから承諾を得ているの。それというのは、桂会長は、５月から入院してるの。会長の意向では、アンナにもう一度会いたいそうよ。そこで、アンナの気持ちを聞きたいと思って」

今のところ、桂会長が父親かどうかは、はっきりしていない。アンナは、特段、会いたいとは思っていなかった。でも、会長が会いたいと言っているのであれば、何らかの理由があるように思えた。また、亜紀にはおじいちゃんがいると言ってしまった手前、一度は会せなければ、嘘をついたことになってしまう。自分はさておき、亜紀に会せるべきか否か、アンナは、ぼんやりと考え込んでしまった。

さやかは、アンナが桂会長を父親と認めたくないことは、重々知っていた。この際、亜紀を使って会長と面会させることにした。「どう、アンナ、会長も会いたいっておっしゃられていることだし、亜紀ちゃんも喜ぶと思うんだけど。ここだけの話だけど、会長の命は、そう長くないの。今を逃したら、会えなくなるかも」アンナは、耳を傾けて聞いていたが、命はそう長くない、と聞いてピンと背筋を伸ばし、固まってしまった。

「マジ、命が長くないって、ガンなの？」さやかは、病状のことは伏せておきたかったが、アンナの気持ちをはっきりさせるために、ズバリ告知することにした。「桂会長は、前立腺癌なの。しかも、肝臓にも転移して、末期ガンの重篤」アンナは、会長のことは、極力赤の他人と思い込むようにしていたが、末期ガンと聞いてかわいそうになってしまった。アンナは、さやかの言葉を疑っているわけではなかったが、もう一度、会長の気持ちを確認した。

「会長は、本当に、私に会いたいと言ってるの？」さやかは、即座に返事した。「そうよ。もう一度会いたいそうよ。アンナ、会ってあげてちょうだい。この機会を逃したなら、二度と会えないかも。会長はアンナを待ってるわ。アンナ」突然腕組みをしたアンナは、うなずいた。「分かった。亜紀に、おじいちゃんがいると言った手前、会せないわけにはいかないわね。すぐにでも会うわ。どこの病院？」

さやかは、ほっとして胸をなでおろし、返事した。「志摩総合病院。早速、ドクターに面会の段取りをつけてもらうわね」さやかは、テーブルのスマホを素早く左手にとって、ドクターに電話した。一度うなずき「ハイ、お願いします」と笑顔で返事したさやかは、アンナに笑顔を向けた。「会長の誕生日、１５日の午前中に面会できるように手配するそうよ」アンナは、ちょっと固い表情で返事した。「そう、そいじゃ、誕生日プレゼントを準備しなくっちゃ」

アンナが、腰を上げようとした時、亜紀がピースを抱きかかえてリビングにやってきた。さやかを見るなり、さやかのもとにかけてきた。「おじいちゃん、いつ会えるの、明日？もう、聞いてくれたんでしょ。ね～～、いつ？」さやかは、ニコッと笑顔を作り、答えた。「約束はちゃんと守ったわよ。おじいちゃんの誕生日、１５日。プレゼントをもって、会いに行きましょう」

「ワ～～～、やった～。おじいちゃんに会える。ヤッタ～～」亜紀は、ピースを両手でつかみ、タカイタカ～イを何度も繰り返した。はしゃぐ亜紀を見たアンナは、たしなめる口調で声をかけた。「亜紀、そんなにはしゃいじゃ、おじいちゃんに悪いわ。おじいちゃんは、病気で、入院してるんだから。いい」入院していると聞かされた亜紀は、しゅんとしてしまった。「おじいちゃん、とっても、悪いの？亜紀とお話しできないの？」

さやかは、即座に亜紀の気持ちを汲み取った。「大丈夫。ちゃんと、亜紀ちゃんとお話しできるわよ。会長は、首をナガ～～クして、待ってるんだって。よかったね」亜紀は、ピースをギュッと抱きしめると、満面の笑顔でリビングから飛び出していった。アンナは、ベッドに寝込んだ会長に何と言って声をかけようかと考えると、胸が苦しくなった。さやかは、ポンとアンナの背中を押してあげた。「何も考えなくてもいいの。笑顔を見せてあげるだけでいいのよ、アンナ」

夢の顛末

　その夜、亜紀は真夏の高気圧ガールになっていた。目がギンギラギンに輝き、頭は冴えわたり、眠気がまったく襲ってこなかった。ウキウキ、ソワソワと部屋の中でピースとはしゃぎまわった。おじいちゃんは世界一の金持ちと聞いていた亜紀は、お金では買えないオリジナルな誕生日プレゼントはないかと考えた。まだ一度も会ったことがないおじいちゃんだから似顔絵はかけないし、今は病気で寝込んでいるから手作りのクッキーはダメみたいだし、考えれば考えるほど、頭が混乱し、寝付けなくなった。

　おじいちゃんを励ますには、あ、そうだ、アンパンマンしかいない。“アンパンマンになったおじいちゃん”、これで行こう。そう心で叫んだ亜紀は、ピースをヒョイとベッドに放り投げると机に向かいアンパンマンの下書きを始めた。亜紀は、突然何かひらめいた時は周りが見えなくなる癖があった。いつもの気まぐれが始まったとふてくされたピースは、「いいですよ、お邪魔虫はさっさと寝ますから」とつぶやき、広々としたベッドの真ん中にゴロンと仰向けに寝転がった。

　８月１５日、朝５時に目が覚めた亜紀は、寝る前に準備していた外出着に素早く着替えた。いつもは、紺のショートパンツをはいていたが、少しでもかわいく見えるようにピンクのポロシャツに花柄のキュロットスカートを穿いた。ベッドから亜紀の様子をじっと眺めていたピースだったが、どこかに出かける気配を感じたピースは、置いてきぼりを食らっては一大事とピョンと跳び起きた。

亜紀の足元までかけて行くとお願いした。「おじいちゃんのところに行くんでしょ。一緒に連れて行ってよ。お留守番はいやよ」亜紀は、果たして猫を病院に連れて行けるものか悩んだが、一応小さくうなずいた。ピースを抱きかかえた亜紀は、つぶやいた。「ママにお願いしてみるけど、今日は病院に行くのよ。猫が入れるかどうか、わかんない。ダメって言われるかもしんない。その時は、お留守番ね」

亜紀は、朝食が終わり、出かける前にピースのことを尋ねた。「ピースも連れてって、いい？」アンナは、目をつりあげて返事した。「何、バカなこと言ってるの。ダメに決まってるでしょ。さっさと、車に乗りなさい」あっさり拒否され、ピースはしょげてしまった。お留守番を頼まれたピースとスパイダーは、聞きなれたベンツのエンジン音に耳を傾けて、おとなしくお土産を待つことにした。

内科入院患者の病室は東病棟の２階以上にあったが、会長の病室は、極秘入院ということもあって、東病棟の地下二階に設けられていた。正面玄関の北側にある駐車場からアンナと亜紀が、あたりをキョロキョロと見渡しながら正面玄関にやってくると、玄関入口横でさやかが手を振って合図した。ロビーの前方にある総合受付にさやかは軽く会釈するとエレベーターに二人を案内した。

エレベーターで地下二階まで降りると正面左手方向に誰もいない静かな廊下を歩いて行った。しばらく歩くと患者名が表示されていない右側ドアの前でさやかは立ち止まった。さやかは、軽くコン、コン、と２回ノックして、ドアを静かに開いた。さやかの後に続きアンナが病室に足を踏み入れると、目の前には病室とは思えない帝国ホテルの一室と思わせるような豪華な個室が目に飛び込んできた。患者の枕元に立っていたドクターは、アンナに笑顔を見せると静かに部屋を出て行った。

王様が寝るような豪華なベッドでは、会長が静かに眠っていた。さやかが会長に声をかけた。「会長。会長。アンナをお連れしました」狸寝入りをしていた会長は、そっと瞼を開いた。さやかは、アンナと亜紀に声をかけた。「桂会長に、ご挨拶して」アンナが足を進めると亜紀はアンナの陰に隠れるように小さくなって歩いた。アンナは、久しぶりに会う会長の顔を覗き見て挨拶をした。「アンナです。ご容体はいかがですか？いろいろとご面倒見ていただき、感謝しています。なんのお礼もできず、恐縮しています。今日は、７７歳のお誕生日ですね。おめでとうございます」

アンナは亜紀を左横に呼び寄せると、アンナは、ピンクとグリーンが交差したチェック柄の包装紙に包まれた小箱を、亜紀は、黄色いリボンを結んだ円柱状に巻かれた画用紙を、会長がよく見えるように胸の高さまで持ち上げた。アンナと亜紀は、笑顔を作り誕生日ソングを歌った。「ハッピィバースデイ、トゥ～ユ～、ハッピィバースデイ　ディア　カイチョウ～、ハッピィバースデイ　トゥ～ユ～」歌い終えると亜紀が小さな声で祝福した。「おじいちゃん、お誕生日おめでとう」

会長は、目じりを下げてニコッと笑顔を作り、うなずいた。「ありがとう。この子が亜紀ちゃんだね。どんなプレゼントだろう～ね～、プレゼントを見せておくれ」アンナは、病人でも食べられるようにと糸島牛乳を使った手作りのプリンを箱から取り出し見せた。亜紀は、一晩かけて描いたアンパンマンの絵を両手で持ち上げて見せた。絵の上部には、“アンパンマンになったおじいちゃん“と青のクレヨンで書かれてあった。

会長は、黙って二人のプレゼントに見入っていた。「ありがとう。生まれて初めてだよ。こんなに心のこもったプレゼントをいただくなんて。本当に、ありがとう」亜紀が描いた会長の顔が、まん丸のアンパンだったことに笑顔で尋ねた。「おじいちゃんに似ていないね。アンパンマンって、誰だい？」まったくアニメを見ない会長は、アンパンマンを知らなかった。

あきれた顔をした亜紀は、即座に答えた。「え、おじいちゃん、アンパンマン、知らないの？正義の味方よ。悪い奴らをやっつけるんだから。すっごく、強いんだから。亜紀、アンパンマン、大好き」亜紀は、あたかもアンパンマンが友達かのように自慢げに話した。目を輝かせた亜紀は、さらに声を張り上げて話し続けた。「おじいちゃん、元気になったら、公園で遊びましょ。ピースもスパイダーも風来坊も、おじいちゃんに会いたがってるんだから」

会長は、目を閉じて、小さくうなずいた。「亜紀ちゃんには、お友達がたくさんいて、よかったね。おじいちゃんには、敵はいても、お友達はいないんだ。亜紀ちゃんがうらやましいよ。それに、おじいちゃんを正義の味方と思ってくれたんだね。でも、おじいちゃんは、残念なことに、正義の味方じゃないんだよ。アンパンマンにやられる悪者の親分さ。戦争で使う機関銃や戦闘機やミサイルを作り、世界中の国家に売りさばく武器商人さ。がっかりさせて、ごめんよ」

アンナは、とっさに亜紀の口をふさいだ。会長は、静かに瞼を開くと話を続けた。「そう、気を使わなくともいい。事実は事実だ。亜紀ちゃん、おじいちゃんの夢は、愉快に遊ぶ子供たちを描くルノワールのような画家になりたかったんだ。でも、なれなかった。結局、どういうわけか、武器商人になってしまった。そして、多くの子供たちを殺してしまった。神様は、許してくれないだろう。きっと、地獄に落ちる」力尽きたかのように言い終えると静かに瞼を閉じた。

アンナは、会長を怒らせてしまったと思い、顔が真っ青になった。亜紀も固まってしまった。さやかが、即座に話に割り込んだ。「会長、亜紀ちゃんは、早く元気になってほしいと、一晩かけて、一生懸命、描いたんです。上手に描けているじゃないですか。ほら、まん丸笑顔の会長って、チョ～かわいい」さやかは、クスクスっと笑った。会長も目じりから涙を流し、笑顔を作った。

さやかは、ぐったりとしてしまった会長を寝かせつけ、三人は静かに病室を出た。二人は、さやかと正面玄関で別れるとアンナは亜紀の手を引っ張り、病院から逃げるかのように小走りで駐車場に向かった。車に乗り込みハンドルを握りしめたアンナは、なんとなくほっとした。子供たちに優しいおじいちゃんと思い込んでいた亜紀は、おじいちゃんが武器商人の悪者と知って、少し、がっかりした。

夢のネックレス

　ヒフミンの姉、香子（キョウコ）は、ヒフミンの激変に困惑していた。７月末までの奨励会受験申込み期限が過ぎてからは、魂が抜けたような子ブタになっていた。毎日のように将棋を指していたヒフミンが、今では、将棋について一言もしゃべらなくなった。勉強机の上には必ず将棋盤と駒が置いてあったが、部屋のどこにも将棋盤と駒の姿はなかった。それまでは、時々、アマ２段の香子に相手を頼んでいたが、それもまったくなくなった。思い余って、香子は将棋の相手を申し出たが、やんない、とあっさり断られた。

　ヒフミンは、受験すれば必ず合格すると確信していた香子は、受験をしないヒフミンの気持ちがわからなかった。そのことで、若いころアマ竜王戦の福岡県代表になったことのある祖父の銀次に相談することにした。夕食後、銀次は、いつものようにちゃぶ台でじっとアマ竜王決勝戦の棋譜を見つめていた。「おじいちゃん、ちょっといい」銀次は、香子のマジな口調に驚き振り向いた。「なんだ。お小遣いなら、もうないぞ。薬代で、我が家は火の車だ。そのくらい、分かってるだろ」

香子は、銀次の正面に胡坐をかいて、銀次を睨みつけた。「違うったら。ヒフミンのことよ。最近変じゃない。将棋をまったく指さなくなったのよ。奨励会は、一生受験しない、っていうし。もう、将棋は飽きたとか何とか言って。あの将棋バカが、将棋を指さないってことは、きっと、何かあるのよ。おじいちゃんに心当たり無い？」銀次は、面倒くさい話を持ってきたとしかめっ面で答えた。「そのうち、気が向けば、指すさ。ほっとけばいい」

でも、香子の気持ちは、治まらなかった。「おじいちゃん、本当にそう思う。あの将棋バカが、将棋を指さないのよ。おかしいでしょ。あいつったら、将棋盤と駒は、友達にやったとかなんとか言って、変でしょ。そう思わない？」銀次は、奨励会試験を受験しなかったことで、ヒフミンの気持ちを察していた。そこで、香子を諭すように返事した。「香子は、奨励会の難しさを知らないからだ。奨励会なんて、そんなに簡単に入れるものじゃない。そのことが、ようやく分かったんじゃないか」

「おじいちゃんって、冷たいのね。何よ、最初から落ちると決めつけるなんて。確かにバカだけど、将棋の天才じゃない。どうして不合格になるって決めつけるのよ。やってみなきゃ、わかんないじゃない。一度や二度、落ちたっていいじゃない。とにかく、何度でも、チャレンジすべきじゃない」銀次は、これ以上ヒフミンのことは話したくなかったが、香子を納得させるために話を続けた。

「まあ、小学生としては、天才かもしれん。だがな～、将棋ってものは、分からんものだ。奨励会に入っても、みんながプロになれるわけじゃない。ほんの一握りの天才が、プロになる。おじいちゃんは、受験をあきらめて、よかったと思っている。きっと、本人も納得してるはずだ」香子は、おじいちゃんを見損なった。頭からヒフミンの才能を踏みにじっているとしか思えなかった。

これ以上話しても無駄なように思えた香子は、自分の決意を述べて立ち去った。「そうなの。おじいちゃんって、夢のない人ね。どんなに可能性が小さくっても、それにチャレンジさせるのが家族ってものじゃない。いいじゃない、プロになれなくっても。本人が、納得するまで、とことんやれば。それが人生ってものじゃない。分かったわ。もう頼まない。必ず、チャレンジさせてみせる」

孫に嫌われてしまった銀次は、じっと耐え忍んだ。確かに、ヒフミンは将棋の天才と確信していた。だが、奨励会に合格しても、将棋を続けさせることができないほど家計は苦しかった。ヒフミンはそのことを察して、あえて受験を断念したと銀次は思った。悩みながらも受験を断念したヒフミンの気持ちを考えると、どうしてもチャレンジを勧めることができなかった。「すべては、俺が悪い。こんな体でなければ」香子に聞こえないようにつぶやいた。

翌日、お友達には本音を話しているんじゃないかと思った香子は、亜紀の家に遊びに行った。ちょうど亜紀がテラスでピースと遊んでいたので、一緒に遊ぼうと公園に誘った。二人は、大きなクスノキの陰にあるブルーのベンチに腰かけた。目じりを下げた香子は、ピースを膝元に置いた亜紀に尋ねた。「亜紀ちゃん、ヒフミンのことだけど、最近、変でしょ。亜紀ちゃんと将棋指す？」亜紀も変だと思っていたので、一度、そのことを香子に話したいと思っていた。「やっぱ、変よね。ヒフミンは、一生、将棋は指さないって。まったく、わかんない」

香子は、ヒフミンの決意を再確認した。「そう、やっぱ、そうか。それにしても、変よ。将棋バカが、将棋をやめられるはずがないのよ。どうしてそんなことを言ったのかしら？受験をあきらめるなんて、信じらんない。いったいどういうこと？」亜紀も同感だった。「そうよ、七転び八起き、っていうじゃない。何度でも、チャレンジすればいいのよ。ヒフミンだったら、きっと合格できると思う」

香子は、合格した時のことを思った。奨励会は、大阪にある。ということは、大阪に住まなくてはならない。そんなことは、火の車の家庭ではできない。もしかしたら、そのために、受験を断念したのではないかとふと思った。「亜紀ちゃん、ありがとう。ヒフミンのことは、任せて。どうにかしてみせる。あの将棋バカから、将棋を取ってしまえば、何が残るというの。将棋バカは、バカでいいじゃない。とことん、バカを貫き通すのよ。よっしゃ、まかせとき、きっと、プロにしてみせる」

亜紀は、すごいお姉ちゃんがいるものだと目をパチクリさせた。「ヒフミン、また、将棋指すかな～。気が変わるといいね。亜紀も、頑張るように応援する」香子は、是が非でも来年は、チャレンジさせる決意をした。来年から働けば、下宿代を稼げると思った。また、もし、合格したなら、弟子入りできるように頭を下げる気持ちにもなった。その時、おじいちゃんの気持ちが、心に響いた。そうなのか、おじいちゃんは、私に苦労させたくなくて、あんなことを。

ガッツポーズで笑顔を見せた香子は、青空を見つめ立ち上がった。亜紀も笑顔を見せて立ち上がると二人は手をつないで家路に向かった。勉強部屋に戻った亜紀は、ピンクの丸椅子に腰かけヒフミンの気持ちを考えてみた。今までは、別にプロにならなくても、将棋を楽しめばいいじゃない、と思っていた。でも、遊びであっても、将棋を指せば、プロになりたいという気持ちがまた芽生えてくるに違いない。そうなのか、きっぱり、プロの夢をあきらめるために、一生将棋を指さないって言ったのか。

ヒフミンの気持ちがわかると、将棋を勧めることは、ヒフミンの気持ちを踏みにじるように思えた。だからと言って、このままヒフミンにプロをあきらめさせていいものだろうかと自分に問いかけてみた。もう一人の自分が、そっと答えた。“どんな理由があるにせよ、簡単に夢をあきらめちゃダメ。”おじいちゃんは、画家になる夢をあきらめ、武器商人になったと言ったが、きっと、後悔しているに違いないと思った。たとえ、人からどんなにバカと言われようとも、夢を追い続けてもいいんじゃないかと思った。

その時、ピースがニャ～～と言って亜紀のひざ元に跳び乗ってきた。「ピース、ヒフミンったら、プロをあきらめるんだって。亜紀は、どうしていいかわかんない。ピースならどうする？」ピースもわかないという顔でニャ～～ンと答えた。その時、ピースのオーラを感じた。「ピースにお願いがるんだけど」ピースは、いやな予感がしたが、聞いてあげることにした。「まあ、亜紀ちゃんの頼みだったら、聞いてあげてもいいけど」

亜紀は、自分の口からあきらめないように言っても、ヒフミンは快く思わないと思ったが、結婚したいほど好きなピースにお願いされれば、きっと、気持ちが変わると思った。亜紀の脳裏に“王将のネックレス”が思い浮かぶとピースを見つめ真剣にお願いした。「ピースにお似合いのネックレスを作るから、それをかけてくれない」ピースは、そんなことぐらいであれば、大げさにお願いしなくともいいじゃないと思った。

翌日、ピースがベッドでスヤスヤと寝ていると、鈴の音がした。亜紀が首輪をつけていた。気になったピースは、亜紀に尋ねた。「いったい、どんな首輪をつけたのさ」亜紀は、ひょいと立ち上がり、引き出しから手鏡を取り出してきた。手鏡に映し出されたピースの首元には、ブサイクな意味不明の物体が鈴の横に取り付けられていた。漢字が読めないピースは、ひげをピクピクさせて尋ねた。「ちょっと、これは何なのさ。ちっとも、かわいくないんだけど」

亜紀は、ニコッと笑顔を作り、お願いした。「これは、ヒフミンに奇跡を起こすお守りなの。ピースが、このネックレスをつけていてくれれば、きっと、ヒフミンの気持ちが変わるはず。ピースと結婚したいぐらい、ピースのこと大好きなんだから。ヒフミンに抱っこされたら、ニコッと笑顔を作ってね」ピースは、イヤなこった、と思ったが、亜紀ちゃんのお願いであれば、しぶしぶ我慢することにした。

昨日も一昨日も遊びに来なかったので、今日あたりは、ヒフミンが遊びに来る予感がした。昼食を終えて、亜紀が窓際でピースと戯れていると、案の定、ヒフミンは、植木の外から手を振って合図を送ってきた。いつものようにベランダに飛び出しピースを両手でつかみ高く持ち上げ、ぶらぶらと振って、ヒフミンをおびき寄せた。能天気なヒフミンは、人目も気にせず大声で叫んだ。「ピース、大好き～～」

ガサツなヒフミンはいつものようにドタドタドタと音をたて二階に駆け上がってくると、素早く亜紀からピースを奪い取りギュッと抱きしめた。一瞬、ピースの首元に目が行った時、ヒフミンの大きな目が点になった。鈴の横に“王将”の駒があった。しばらく黙っていたヒフミンは、グイッとピースを見つめると、チュ～～とキスをした。亜紀は、心で手を合わせた。そして、神に祈った。“ヒフミンがプロになれますように。神様、お願い。神様、お願い。”